



われら中大生6人 エリートランナー!?



中央大学陸上競技同好会



八王子・泰安市スポーツ交流で訪中



私たち中央大学陸上競技同好会(体育同好会連盟)のメンバー6人は八王子市の協力を得て、中国・泰安市での「2015泰山国際マラソン」(10月18日)に出場した。初の海外遠征。首都北京の空港から南へ高速鉄道などで約3時間半。見知らぬ土地で私たちは突如、スーパースターになった。

文&写真 学生記者 野村睦 (法学部3年)

大学に入学してから、もうすぐ3年が経とうとしている秋、初めて中国を旅した。

中大所在地の八王子市役所多文化共生推進課から中大陸上競技同好会に国際大会参加のお声がかかった。

泰山国際マラソンに参加した
中央大学陸上競技同好会
メンバー6人

参加者	順位
野村 睦(法3)	
石原駿也(法3)	4位
今村直道(経3)	
三好右恭(文2)	2位
小篠正光(経2)	3位
青井遥香(商2)	

※順位はハーフマラソン成績

八王子市と泰安市は友好交流都市(2006年協定締結)。

名山と称される泰山を冠した「泰山国際マラソン」は両都市間のスポーツ交流のメインイベントで、私たちが国際大会の招待選手となった。国際大会の招待選手といえば、エリートランナーと言われる!?

6人のメンバーは相当に意気込んだ。

泰山がある泰安市を調べた。泰山は世界遺産だった。古くから多くの漢詩に詠まれている。泰安市の人口は約557万人。八王子市人口の約10

倍。新旧入りまじった大都市のようだ。

出発前、気掛かりなことが幾つかあった。「水や食事など食品の衛生状態は」。「公共交通機関は安全なの」。メンバー全員がバッグにミネラルウォーターや軽食を詰め込んだ。

羽田から7時間30分

羽田を発って約4時間で北京に着。バスに約1時間半揺られ、日本の新幹線によく似た車体で「和諧号」などと呼ばれる高速鉄道(高铁)のターミナル駅「北京南駅」に着いた。



中大陸上競技同好会のメンバー。左から野村睦、小篠正光、石原駿也、今村直道、青井遥香、三好右恭(写真提供:八王子市)

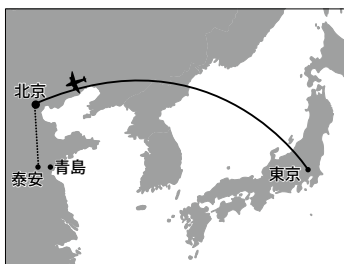


中国の高速鉄道 (写真提供:産経新聞社)

乗車2時間ほどで泰安市に入った。

この道中で体験したことを忘れない。北京空港では背中にも「POLICE」と大書した警備担当者があちらこちらに立っている。異様な緊張感に包まれた。

空港から北京南駅までのバス移動では、突然、急ブレーキがかけられた。運転手がクラクションを鳴らす。



車窓の外を見ると、バスのすぐ横を電動自転車のような乗り物が走り抜け、さらには道路を横断して行った。

これだけでは終わらなかった。バスの横を走る車が何の合図もなく、前方に割り込んできた。初めて見る中国の人の動きに、競技へ高まっていた気持ちは一転した。メンバーは互いの目を見た。

「PM2.5」の洗礼

北京南駅へは無事到着した。バスを降りると今度は鼻がムズムズしてきた。空気が重く感じられる。晴れているはずの空はモヤがかかっているように見えた。駅構内に入ると大気の状態がよくわかった。室内にもかかわらず、モヤがかかっている。

マスクは持参してきたのだが、見たところ現地の人々は誰もマスクを着けず、私たちが過敏なのかと思い、バッグにしまったまま。それがよく

なかった。ホテルの部屋では鼻水が止まらなかった。後日知ったことだが、その日は「PM2.5」(別掲)が多量に観測されていた。

高鉄の駅構内に入る際、パスポートと乗車券を提示し、手荷物検査を受ける。バックを空港にあるようなベルトコンベアに乗せる。ここまでは想定内だった。

パスポートと乗車券の確認が何度も行われた。改札、車内、到着駅の改札でも執拗なセキュリティーチェック。担当者はぶっきらぼうで眉間にシワを寄せていた。威圧的な態度に乗車券をなくしてはいないか、と何度もヒヤリとした。

高鉄車内の快適さと安定した走りには驚いた。窓や座席など車内の作りから雰囲気まで日本の新幹線とよく似ている。車内販売もあった。安心したのか、いつの間にか眠りについていた。



ハーフマラソン2位に入った中大・三好選手



みんなで、カンフーポーズ。決まっているかしら



泰山国際マラソン・ハーフマラソン表彰式。左から2人目が2位の中大・三好選手、右から2人目が3位の中大・小篠選手(写真提供:八王子市)

外が暗くなったころ、ようやく泰安市に到着した。現地の市職員と大学生2人が出迎えてくれた。2人とも大学で日本語を専攻しているという。あいさつするのももどかしいように、日本語で次々に話しかけてきた。

翌日の大会諸情報から泰安市の現状、さらには日本のアニメやプライベートの話まで。年齢が近いせいか、すぐに打ち解けた。女子学生の孫雨

晴さんとは並んで写真も撮った。

中国人に対する先入観、目の前にいる学生2人から受けた印象、大きな違いを肌で感じた。

中国風スタート

翌日は大会会場へ。参加者は泰安市内、中国各地からと大勢だ。競技はマラソン、ハーフマラソン、5キロと3部門。私は5キロの部に出場し、他5人はハーフマラソンへ。

部門別の時間差スタートに慣れている私たちは、中国スタイルのスタートにびっくりした。全選手が一斉に走り始めるという。ハーフマラソン参加選手が前方のマラソンスタート地点に。5キロ選手がハーフマラソン選手群にいる。

スタート前から好位置を取ろうと押し合う。独特の雰囲気圧倒された。スタートすると会場はさらに活気づき、上空を飛ぶ小型無人機「ド



小型無人機ドローン (写真提供:産経新聞社)

ローン」に向かって手を振り、ワーツと歓声上がる。

5キロ走の私は、すぐにレース終盤を迎えた。沿道の応援を受けて、フィニッシュテープを切ると、ゴール地点で出迎えてくれた大勢の子供たちから、写真撮影を求められた。

中国語はよく分からない。英語で日本から来たと説明すると理解してくれたようだ。初対面だというのに、「ピクチャー、ピクチャー」と言っただけで、いろいろなポーズを取らせる。

一人がノッてきて「ユーア スーパー スター」とまで言う。敬意を表してくれているのだろうか。ここは日中親善だと思い、私は左手を挙



仲良くなった女子学生の孫さんと。中国では「Vサイン」をしないようだ。右は学生記者・野村



泰安市

泰安市は、黄河下流地域である山東省の中部に位置し、中国五大名山「五岳」の一つである泰山の南麓にある都市です。山と町が一体になっているのが特徴で、泰山から「泰」の名を取り、また国の安定と民の安らかという願いから「安」の名を取り、「泰安」と名付けられました。

泰山

泰山は、豊富な文化遺跡が残っていることから、中国はもちろん世界的にも名高い名山中、1987年には、ユネスコの世界遺産(複合遺産)にも登録されました。主峰の玉皇頂は、標高1545mで国内外から年間約800万人の観光客が訪れています。

海外友好交流都市

2006年の市制施行90周年を機に、幅広い市民交流が実現できるよう、中国・泰安(たいあん)市、台湾・高雄(たかお)市、韓国・始興(しふん)市の3都市との間で友好交流協定を締結しました。(後略)
(以上、八王子市HPから)

PM2.5

中国の深刻な大気汚染を示す言葉。微小粒子状物質「PM2.5」を含む汚染指数は、最悪レベルとなる「危険」では345を記録する。上空は、モヤがかかって、日中でも薄暗く感じられる。路上ではマスクを着けて歩く人の姿が目立つ。

げ、右手を左ひじに添える“ウルトラマン”ポーズをして見せた。子供たちは大喜び。そのポーズを一緒に取って写真を撮ろう、とカメラを友達に託す。「ありがとう」と日本語で声をかけてくれる子供もいた。

ハーフマラソンのゴール地点へ急いだ。優勝は黒人系選手。中大勢が2位、3位、4位に入った。

今度はレースを終えた男子学生3人が大勢に囲まれ、インタビューに続いて記念撮影会。中大の他2人も完走し、大会は終わった。

悩んで知った「違い」

中国滞在では、2つのことに悩まされていた。

食事が合わなかった。味付けが違う。香辛料は独特の強い香りを放ち、唐辛子が丸ごと入った皿には手が出なかった。ごちそうを前にしながら空腹だった。

日本から持参したカステラは初日こそ我慢して食わずにいたが、2日目のレース当日朝に一切れを口にした。もう一切れをレース後に。最後の一切れはレース後、チームメートに差し入れした。

格式あるとされる4つ星ホテルのレストラン。バイキング形式のフルーツテーブルにはコバエが無数に止まっていた。

次はトイレ。使用したトイレットペーパーは流さないのが基本と教えられた。ペーパーは脇の汚物入れへ。水が流れないトイレもあり、こんな衛生状態では…とホテルに戻るまでじっと我慢することもあった。

初めての中国では驚きや新たな発見が続いた。今までの情報や知識では体感できなかったことばかり。中国を近くに感じるきっかけになった一方、日本とは異なる面を等身大で感じた。

我が身に置き換えると、来日した外国人学生も、中大に留学している外国人学生も、同じような違和感を日本の生活で覚えていたかもしれない。

基準は一つではない。国ごとに基準があることを知った。

行ってよかった。中国を知ってよかった。訪れてみなければ分からないことがある。世界をさらに広く感じるようになった。次はどの国へ行こうか。学生時代にそれを知り、チャレンジする気持ちがわいてきた。

きっかけを与えてくれたのは陸上競技だ。八王子市、中国・泰安市、中国人学生の孫さんら、レース会場の子供たち、中大を含む多くの関係者に感謝する。

私はこれからも、素晴らしい出会いのある陸上競技を続けていく。次に走るときは、泰安市で会った彼女らの顔を思い出すだろう。